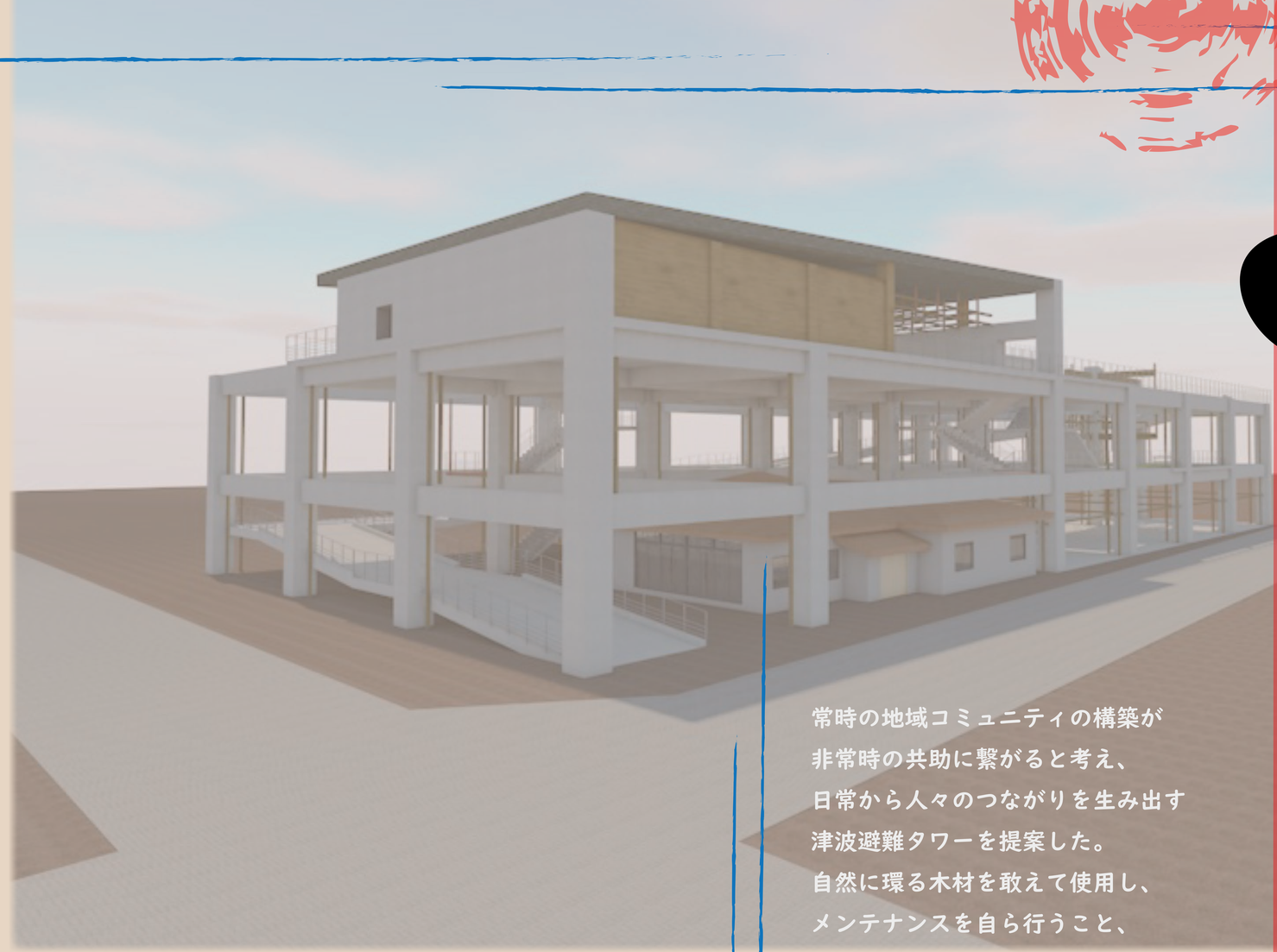
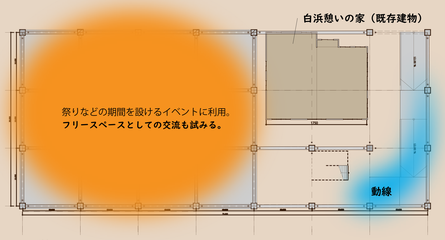
よりどころ

津波避難タワーは災害に特化した公共建築であることから、
強度第一の意匠性が乏しい設計となりがちであり、災害時のみの使用が想定されている。
そのため、その多くは近隣住民の日常からかけ離れた建築となっている。
そこで、日常生活でも地域住民が使用し、地域のよりどころとなる親しみある津波避難タワーを提案する。

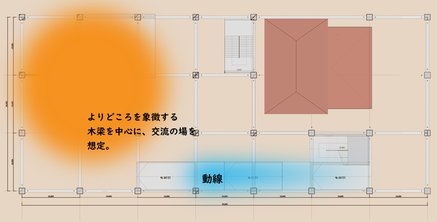


常時の地域コミュニティの構築が
非常時の共助に繋がると考え、
日常から人々のつながりを生み出す
津波避難タワーを提案した。
自然に環る木材を敢えて使用し、
メンテナンスを自ら行うこと、
祭りなど期間を設けたイベントを開催することで
常日頃から建物に使用用途を与え、
日常使いすることで
災害時の漠然とした不安を少しでも和らげる。
地域住民のよりどころとなり、
災害時の死者数を軽減したい。

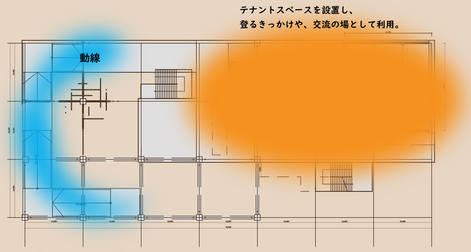
平面図・立面図



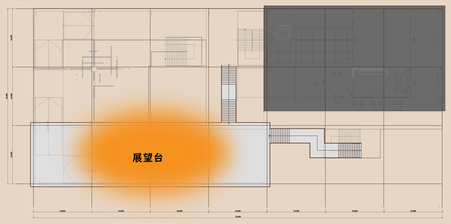
1 階　平面図



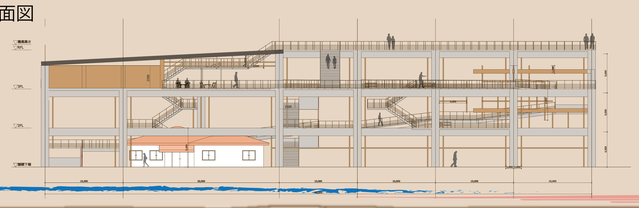
2 階　平面図



3 階　平面図

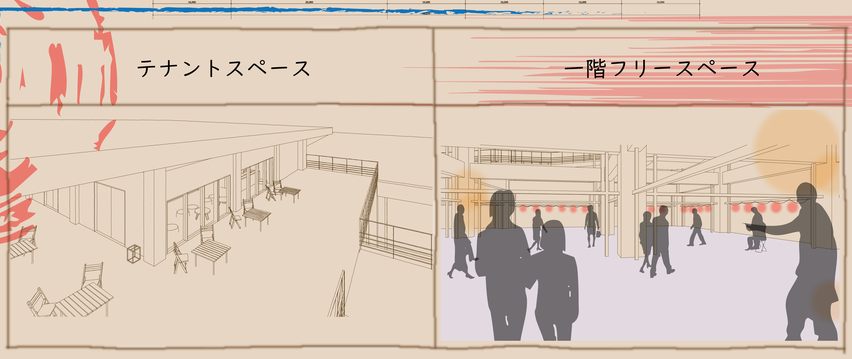


4 階　平面図



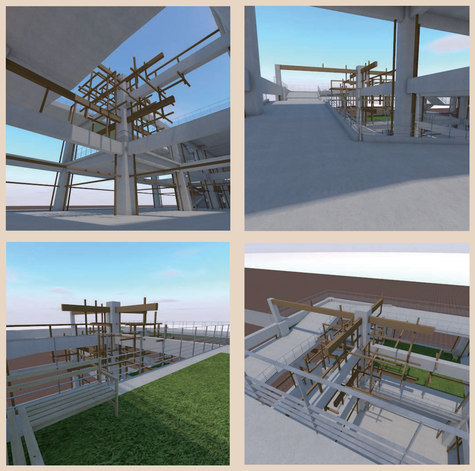
コンセプト

津波避難タワーが必要となる災害時、不安を抱えた多くの近隣住民が
一次的に避難する既存の津波避難タワーは、人命保護のための構造と
必要最低限の設備だけを持つ設計思想のため日常から使われる事が
少なく、避難者にとって非日常の空間となる。
常日頃から建物に使用用途を与え、日常使いすることで、
災害時の漠然とした不安を少しでも
和らげることを目的として設計する。

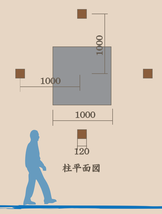


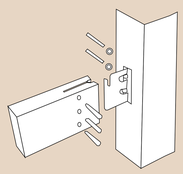
1 階では祭りなど期間を設けるイベントに活用できるステージの役割を果たすため木をモチーフにした軸組構法を用いた意匠梁を設置。3 階の木造建築は倉庫とテナントスペースに分かれており、非常時の備蓄品を蓄え壁には非常時の際取り外し可能な 45×45mm の角材を燃やすことができる。

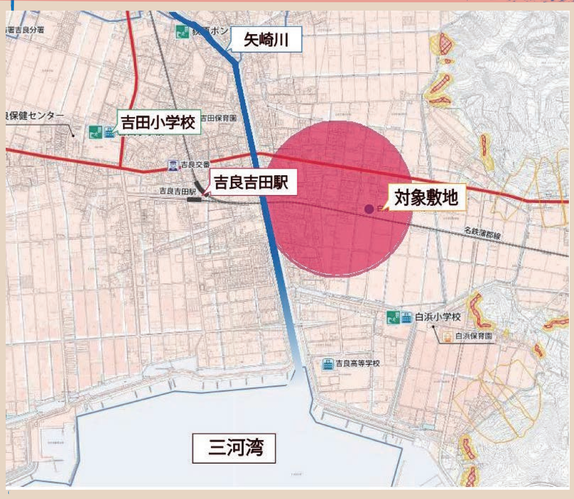
断面パース



構造部材の中に木を使用し敷地に入ったときに木を見上げるような
安心感を与えることを目的とする。







吉良吉田駅から約 1 k m　徒歩 13 分
津波到達時間（過去最大地震モデル）：10 分
・収容人数：30 人
・避難人数：100 人

矢崎川東岸地区
津波時基準水位　0.5m～ 1.0m
津波到達予測時間　10 分

過去の被害

1707 年	宝永地震	津波被害
1854 年	安政東海地震	堤防決壊 液状化

写真 1　白浜憩いの家

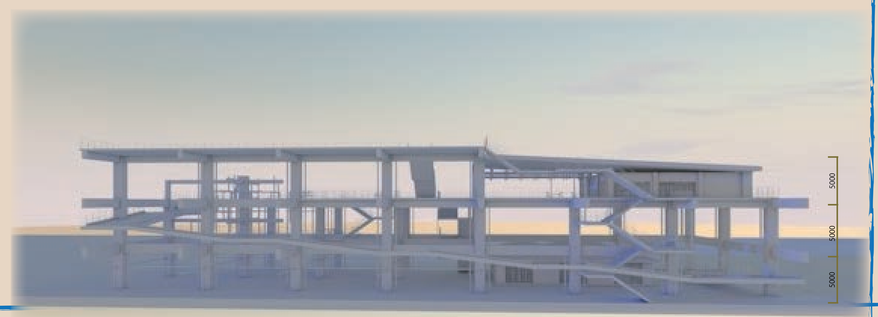
対象敷地

愛知県西尾市吉良町
白浜憩いの家（写真 1）

人口 2.1 万人

愛知県の三河湾に面する西尾市吉良町（人口 2.1 万人）は
過去にも南海トラフによる大規模地震によって、1707 年
宝永地震の津波被害、1854 年安政東海地震の堤防決壊と
液状化の被害を受けている。

図 1 より矢崎川東岸地区の津波時基準水位は 0.5 ～ 1.0m 未満、
既存の避難施設（吉良小学校）まで徒歩 10 分以上である。
この地域は三河湾だけでなく矢崎川にも面しており、
津波が川を遡上することも想定されるため対岸の吉田小学校までの
避難が困難と考える。
矢崎川よりも海に面する既存の老人ホームを敷地に選定した
図 2 に示す既存建物を残しながら、
災害時の一次避難所となるだけでなく、日常的に地域住民が集う
津波避難タワーを新築することで、
地域住民の交流の場としての活用を見込む。



清水研究室　相馬未沙